

カルシユの足跡を追って

◇10◇

若松 秀俊

フリーデルンの話に興味が、結局、時間がとれず、幼な友達はメヒチク味をもった私は、松江市これを断念した。帰国後、役所と島根県庁、島根大学の四月にやっと、この件に本格的に取りかかること、hの発音が困難なので、情報は全くといっていい。その後、フリーデルン

多忙で、彼女とはクリスマスにカードを交換したのメヒテルトに、電話とだけであった。ただ、関連する史実と人名の確認を細々と行っていた。

出会い

(中)

年が改まり筆者の周辺に種々事情が生じたこともあって、その後も十分に時間がとれなかった。しかし、折しも開催されたフランスでの遠隔医療

た。これから得られた情報をもとにして、かつてのカルシユ博士の生徒とが、一九六八年にカルシユ博士は旧制松江高校同窓会から招かれた。それ

で筆者に紹介してくれた。さらに電話番号を調べ、ことがあった。そのなかで国内のカルシユ博士に縁のあるキーパーソンで、ある酒井勝郎、増田義哉、白石磯、遠藤捨雄、江上正孝に最初に連絡をとることができた。

（東京医科歯科大学大学院教授）

細々と史実確認の作業



フリーデルンと筆者（99年9月5日、シユトゥットガルトのホテル）

ことができたが、当時の松江高校の同窓会に関して全く予備知識のない筆者には把握できないことばかりであった。カルシユ一家の住んでいた奥谷町の洋館の前で竹原と写真を撮った。後になって関連資料を手に入れ、この洋館に個人的に特別に興味を持っている人がいることや、カルシユ周辺の同僚のウッドマンとの関係が分かった。

ところで同窓生の資料を探して提供してくれたのが芦屋在住の白石であった。ある集まりで筆者の話をしたのがきっかけで、見も知らない人から手紙や資料を受け取ることができた。この白石がカルシユ博士の調査と顕彰のひとつの鍵となつた人物である。彼については後述することにする。

立ち寄り、会おうとしたd（メヒテルト）とよを、アルファベットの形

ももちろん、住所もアルファベットなので、まず対応する日本語を調べ、討するようになった。現町の彼の自宅で面会する